



# ガハテ村通信

篠山ナマステ会 事務局 〒669-2221 篠山市西古佐921 振替口座 00930-6-29629



日本での体験をもとに村づくりにかける思いを語ってくれました。  
(左からランマヤさん、アチャンマ君)

## ガハテ村最後の研修生 交流活動の今後を考える！

平成二十四年度のPHD研修生の研修報告会が二月十六日四季の森生涯学習センターで開かれました。ネパールのランマヤ・タマンさんは篠山市では有機農業を中心に二週間、アチャンマ・ラマ君は有機農業、幼児教育、健康管理、市内小中養護学校や高校での研修・交流活動で四週間近くを過ごし、日本で学んだことやこれからの抱負を元気に発表してくれました。

平成二十四年度でもって、ガハテ村のあるマハデブス・タン地区からのPHD研修生の来日は終了します。これまでの四年間でこの地区からの研修生は合計で七名になりました。このうち、篠山ナマステ会が支援と交流を続けているセティディビ小学校の卒業生は二名(男女各一)となっています。

いずれも二十代の若者で、日本で学んだ化学肥料だけに頼らない農業、商品価値のある農産物の生産・販売、住民の健康管理、就学前教育等を中心に、先発の社会奉仕NGOサマ・セフ・サムハ(SSS)と連携して村づくりに取り組むことが期待されます。

彼らの村づくりはゆっくりとした歩みとなるでしょうが、篠山ナマステ会はSSSやこの若者たちとの連携を更に強くしてその村づくりに協力すると共に、共に学び合える豊かな交流活動をつくりあげていきたいと思います。

- 平成二十一年度〜ビシヨ・ジツト君(男性)
- 平成二十二年年度〜ウルミラ・タヌワールさん(女性)とミン・クマリさん(女性)
- 平成二十三年度〜ラメツシユ・シュレスト君(男性)とパツサン・ラマさん(女性)
- 平成二十四年度〜ランマヤ・タマンさん(女性)とアチャンマ・ラマ君(男性)

ビシュニュー・マニ・ネパール  
**通信員報告**  
2012. 12

私たちはみんなこちらで元気にしております。ダサインとデイパワリのお祭りを済ませた後で、仕事は順調に進んでいます。セティ



ビシュヌ・マニさん

デイビ小学校とラダ・クリシュナ・ガナ・シヤム小中学校の授業も順調です。奨学金を受けた少女たちも順調に学んでおり、きちんと授業を受けています。

先週、私は運営委員長及び七小校長と学校の授業、飲用水、衛生のこと、村のその他の状況について話し合いを持ちました。そのうちに、彼らは「私たちは学校やその他の状況を前向きに改善していく用意ができています」と言いました。

ネパールでは気温が日ごとに変化しており、寒くなってきました。ガハテやその他の村の農家は農作業で忙しくしています。米収穫後の作業や畑に野菜、白大豆の植え付け等を行っています。

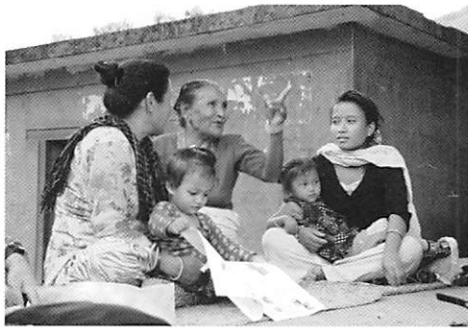
先週、私たちは前PHD研修生ラメツシュ及びパッサン、ビシヨ・ジツトの父テク・バハドゥール、組合会員ジャヤン・バハドゥール・タマンと会合を持ち、組合のこと、セ小のこと、彼らのその他の計画について話し合いました。そして、彼らは月例会を持って互いに意見交換することになっています。私は彼らがこれから積極的な活動を作りあげてくれることを期待しています。

組合、オレンジプロジェクト、ラメツシュさん及びパッサンさんの状況を簡単に報告します。

組合：組合は30人(男性17,女性13)の会員があり、彼らから83,509ルピーを集めて、全額を野菜農場に投資しました。

テク・バハドゥール・タマン：彼はオレンジの木に袋を被せ、水を遣っていると云っています。彼の経験によると、最初のオレンジツリーはうまく生長しなかったが、2回目の多くは順調に生育しています。彼は自分がオレンジの木の世話をする約束をしています。

パッサン：彼女は裁縫研修を受けています。今は学校制服を完全に仕上げられませんが、研修を終えれば、学校制服やその他のものを縫製できるでしょう。家庭では農作業をしています。彼女はデイトムカ公立キャンパスで学士取得の勉強と日本で学んだ知識を村人にレクチャーする計画を持っています。今は、野菜(カリフラワー、トマト、ラディッシュ(二十日大根)、Chilly、それに少しの豆)の農作業をしています。



ラメツシュ：彼は養鶏をしており、現在400羽を飼育しています。彼は日本での研修の後、事業が拡張して進んでいると言いました。彼は養鶏についての知識を持っており、大きな利益を上げています。私の観察によれば、彼は自分の事業に養鶏知識を活用し

ており、養鶏と事業経営について関心ある村人に知識を提供しています。

ウルミラは今産後の休暇を取って、バルワの自宅で休養しています。

平成二十四年度の研修生からの手紙  
**篠山ナマステ会のみなさまへ**

アチャンマ・ラマ・ネパール

こんにちは。ホームステイさせてくれたり、家族のようにむかえてくれたのでうれしいです。篠山市のこととか学校、みせ、ダムのことをおしえてくれました。あなたたちのおうえんで、ほいくえん、ほけんセンターとかのうきょうのべんきょうもできました。けんしゅうはとても楽しくべんきょうすることができました

篠山に行ってデカンシヨのおまつりがとても楽しかったです。いろんなひとたちに会うことができて、話すことができました。いろいろなことがあって、いろいろと話して、私もべんきょうになりました。みなさんのおかげで、いろいろなべんきょうをおしえてもらいました。いつまでもわすれないようにします。おせわになりました。どうもありがとうございました。



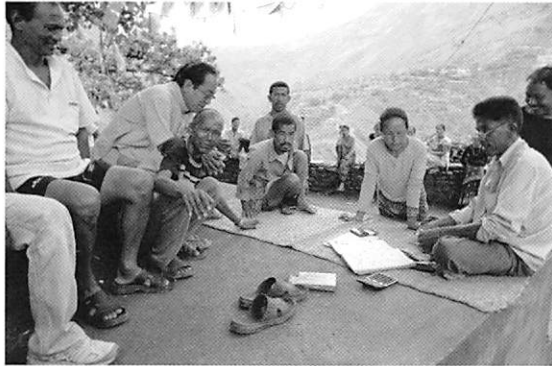
またお元気であいいたと思います。またね。

# ネパールスタディツアー2012 次期研修生を迎えるピンタリ村

農業や生活で水の問題は重要である。マハデブスタンVDCとは異なる地でこの問題を克服し、次期PHD研修生の選考先となったピンタリ村を訪れた。

カトマンズからジープで3時間。塩のみ他から得ているという自給自足の生活をしていて、人にも環境にも優しいピンタリ村。百五十戸、千人程が、農業中心の生活を送っている。昭和三十年代の、ふるさと篠山そのものだ。初めて訪れたが、妙に懐かしさを覚えた。

水力発電 入。五年後には大きな現在の発電システムを三百万ルピー（村負担は六十万）を投じて導入した。その際、メンテナンスの為の研修も学んでいる。昼間の水は、粉ひき機や脱穀機、精米機の動力に変わる。そ



アタラコンクの寄り合い

人里離れた山村にも灯りがあることに驚いた。二十年程前に小さなインド製発電機を導

の作業に二名が従事しているが、入札により決定するのもユニークだ。

**先人の努力** 発電機を回す水は、切り立った山の中腹を流れる2kmの水路から供給される。六十五年ほど前、この村に嫁いできた二人の女性が発議したという。先人の努力により不毛の大地は潤った。

発電機を回した水は田畑の溝へ。現在、飲料水は水質の関係で別の水源から引いている。雨期ゆえの光景かもしれない心が和む。しかし、過酷な居住環境であることには変わりはない。

**幸せな気分** ここではゆったりとした時間が流れる。ネパール時間というより、新聞もテレビもなくとも生活できることを感じた喜び。ロンドンオリピックでメダルを取ることだけを問題にすることにどれだけの意味合いを持つのかといったシンプルな価値観の変容だ。正確な時計はいらぬ。だいたいの時刻を示す時計があれば良いのだ。

家族揃って食事をとることは当たり前だが、新鮮に思えた。話し好きで、人懐っこいし、家族の仲が良い。特に兄弟は一段とそうだ。農繁期は家族総出で作業をすることから、自然と培われたことなのか。少しのあいだであったが、家族の一員になり幸せな気分になった。

**格差** 菩提樹の下で「アタラコンタ」という森林の世話をするグループ（男女共）が集っていた。所属は百名ほどだ。村の発展のために二十年ほど前に結成された。お金に困っている人への貸出や、村の費用を調達し、今まで百万ルピーを拠出したという。バイオガスシステムの導入は三十七戸（二十五%）にとどまる。村を歩くと、洗濯の行き届かない服を着たはだしの子どもと出会う。

**有機農業** 田の畦草は、山羊の餌となり、乾燥したトウモロコシの軸は燃料や乾季の動物の餌になる。落ち葉は水牛の敷きものから有機肥料となり、田畑に還元される。動物の糞尿はバイオガスに変換される。有機物の無駄がない。このことは村においては有機物の更なる増加は望めないことも意味する。限られた農地で生産性をあげるためには、適量の化学肥料は必要だろう。ただ、日本では、化学肥料に頼りすぎ、地力が格段に低下した。有機物の活用等に学ぶことは多い。

変わりゆく村 ピン（緑）タリ（土地）と名付



村の将来を担うことを期待された次期研修生 (右から2人目)

切り拓いて作られた村。五年前には国道から細い道をつけたが、二年前には政府の援助で車が村に到着して、流通の足がかりが出来た。若者は町の学校に通う。各種機関の援助を受け

入れて、着々と村は変貌して行く。**明日を拓く** この村から次期研修生が来る。選考会に多くの青年が集まった。

若者は、「伝統的な農法では収量が少ない」「日本で農業技術を学び、生産性をあげ、豊かなくらしになれば」と意欲を燃やす。村の将来を担う若者は、村に合ったやり方でバランス良い開発を約束してくれそうだ。（松本）

## 若い力が生きる村づくり

小嶋 英毅

私はネパールを訪問したとき、カトマンズでは必ずペンション・バサナに泊まる。このホテルのマネージャーであるウダブ・シュレスタ君は十年前から村の若者三五人でNPOを結成し、村づくりに取り組んでいる。昨年六月、私は事務局長若狭氏と共にこの村を訪問することができた。

**ウダブ君の村** 彼の村はカトマンズから南東、直線距離にしておよそ八五km離れた山系の中腹(海拔千九百メートル前後)に広がる村である。ウダブ君によると、ネワールを中心にタマン族やダリット、モンゴル系などが混住する人口三千六百人ほどの、かなり大きな村である。

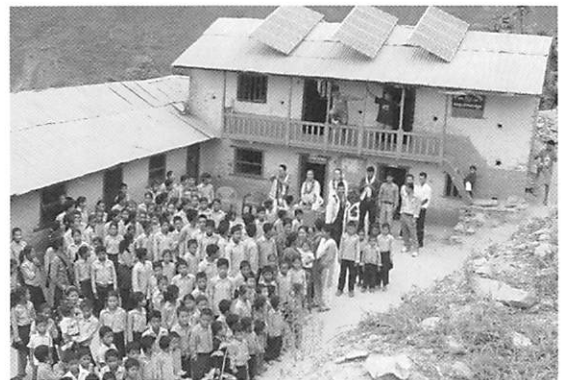
村に入ると、農家のわらぶき屋根に小さなソーラーパネルが取り付けられているのが分かった。この村にはまだ電気が来ていないのだ。

「生活改善の一環として、村にソーラーパネルを導入することも私たちのグループがすすめた。」とウダブ君は胸を張った。

**村の学校** 先生や生徒たちが道の両側に並び、拍手で私たちを出迎えてくれた。

この学校もやはりウダブ君のNPOが中心となって建設したコミュニティスクールである。現在第一学年から第八学年までであり、生徒数は二八七名、教員は一名。更に九ヶ月の教室を増築中だった。

**若い力** 私が感動したのはこの村に若いエネルギーが満ち溢れていたことである。村づくりの先頭に立っているNPOの幹部は三十歳前後から四十代前半、そしてこの活動に多くの二十代の若者が参加



している。教員も校長を除けば全員が三十代半ばまでである。グループの活動を説明する事務局長は、村民の支持を受け、村づくりを担っているという自信に裏打ちされていた。

### 村民の参加

このNPOの最初の事業は水道敷設だった。それまで、水は谷底の川まで往復一時間をかけて汲みに行っていた。NPOは貯金十萬ルピーをはたき、農家からも一戸当たり五千ルピーを集めて山から水を引いた。ウダブ君らの村づくりの第一歩は女性を水汲みの重労働から解放することだった。

私はこのNPOの村づくりにおけるウダブ君の存在の大きさを思った。彼は、生活改善を目指す村づくりのNPOを有志と結成したとき、その活動に私財を投じた。特に、村人の要望が大きかった学校建設のため、その用地を無償で提供したのである。

### 夢を語る

「これからは村にトイレを普及させることが課題だ。また、学校のそばに保健センターも設置したい。」とウダブ君は夢を語る。日本との交流についても意欲を語ってくれた。

彼の村づくりにかける本物の「志」が若者を動かし、村人の信頼と支持を受けているのだ。再訪を心に誓って私達は村を後にしたのだ。

## 地域活動報告

### ■丹波黒大豆枝豆を販売

篠山ナマステ会の資金確保の為、十月二十日と二十一日の両日に渡り「丹波たんなん味覚まつり」の会場で黒大豆枝豆の販売を行いました。用意した三百四十袋は二日目の午前中に完売し、七万七千五百八十九円の売り上げがありました。



お買い上げいただいた皆さんありがとうございました。

### ■人権フェスタinささやま

十二月四日から九日に渡り篠山市民センターで「人権フェスタinささやま」が開催され、ナマステ会員の持ち寄りによるバザーとセティデイビ小学校の近況とピンタリ村の水事情と題しての写真展を行いました。

バザーの売り上げは一万三千九百五十円で、ナマステ会の今後の活動資金にさせていただきます。

平成二十五年度の総会 四月二十日(土) 十三時三十分から四季の森生涯学習センターで開催します。記念講演は、アジア協会 熱田典子氏を予定しています。

ホームページとフェイスブック 篠山ナマステ会の活動の様子を発信しています。ご意見等もお寄せください。